

図書館職員学びなおす講座

第5講座「主題専門知識」レポート

江戸末期の出版事情と、作家の生活

～曲亭馬琴を例に～

2012年 3月19日

大町北高等学校 学校司書

竹腰史佳

## はじめに

日本で初めて筆一本で生活したという江戸時代の作家・曲亭馬琴は、非常に僕約家だったといわれている。それはなぜなのか。また、馬琴の作家としての収入は現代におきかえるとどれくらいだったのか。代表作『南総里見八犬伝』(文化 11 (1814) 年～天保 13 (1842) 年 以下『八犬伝』とする) に関する記録や論文をもとに、収入を計算し推測してみたい。

計算の参考にするのは、磯田道史著『武士の家計簿』(新潮新書, 2003 年)。これは、天保 13 (1842) 年 7 月から明治 12 (1879) 年まで記録された加賀藩士猪山家の家計簿を通して、幕末維新の武士の生活を分析したもの。年代は近いが、西日本の金沢と東日本の江戸という経済地域のずれがある。ただ、江戸の金を金沢の銀で両替しているので、およその金額を推測するには良いと思われる。また現代感覚と米価換算という二種類の計算方法が出ているが、金銭感覚が伝わりやすい現代感覚をもとにしたい。以下、文中に出てくる通貨換算 (\*\*円) は、1 匄を 4000 円、1 両を 30 万円として計算する。

### 1. 江戸時代の出版および読書はどのようなものだったか

#### ○出版

各地に本屋があり多くの本が出版されていた。ジャンルもいくつかに分かれ、馬琴が主に書いていたのは、<sup>よみほん</sup>と呼ばれる漢字を多用した小説本と、<sup>じょうかん</sup>と呼ばれる絵が主のやさしい本の二種類だった。

現在と違って印税が無く、作家の主な収入は本屋から支払われる「潤筆」という稿料のみだった。原稿は買い切りで、本が売れてもそれに応じて稿料が上乗せされるわけではなかった。本が売れれば売れるだけ本屋は儲かるが、作家の懐は潤わない。また、印刷のもととなる版木は本屋のものだった。版木を作ってしまえば刷り放題だったともいえる。原稿を本屋同士で売買し、作家に断りなく版木を作つて出版することもあった。これについては馬琴も苦情を申し入れている<sup>1</sup>。

#### ○読書

安価な合巻は銀 1 匄 (4000 円) ほど、『八犬伝』が分類される読本は銀 20 匇 (8 万円) で、非常に高価であった。そのため、新刊を買うのは一部の富裕層と、貸本屋であった。貸本屋とは後に本を詰めて各家を周つて本を置いていき、一定期間過ぎた後に回収くるという、有料の移動図書館のようなものであった。つまり、現在ほど本が売れない時代であった。

### 2. 馬琴の年収はどのくらいだったか

人気作家であった馬琴の読本の稿料は、10 両から 15 両であったようである。また毎年、二種類から三種類の読本を平行して書くため、読本からの稿料だけで 30 両程度はあったよ

<sup>1</sup> 「南総里見八犬伝 第九輯卷之五十三下 回外剩筆」『南総里見八犬伝 12』2004, 新潮社

うである。さらに、馬琴は合巻を多く出していた。そちらの稿料は読本の3分の1から半分の5両程度といわれ、合わせると馬琴の稿料は、年間約50両（1500万円）となる。しかも最盛期にはその倍はあったといわれている。年収1500万～3000万円といえば、現代でも高収入である。しかし、家計は苦しかったようである。

### 3. 家計が苦しかったのはなぜか

「（馬琴は）収入は多くとも支出も多い（中略）と言った。その支出先は、馬琴によれば、親類縁者の貧しい者への援助、祖先の墳墓の再立、書籍の購入等である」<sup>2</sup>

#### ○本を買いすぎた

馬琴にはどれほどの蔵書があったのか。前出の「回外剩筆」で「和漢必要の書籍を、購求する者五十有余年、其書藏めて、五六千巻、六十余櫃に至りしも」と本人が述べている。五六千巻を単純に5000～6000冊としておよその金額を推測してみよう。『武士の～』63p表4に、猪山家が売り払った物品の一覧とその金額がある。それによると、書籍で最も高価なものが1冊55匁（22万円）、安いものは18冊で35匁（14万円）。馬琴の蔵書には高価なものもあったと思われるが、手元の資料ではわからないので上記を参考に1冊約7800円として計算してみると、総額約4680万円。50年間に購入したとして1年間の書籍購入費は93万6000円で、年収のほとんどを書籍の購入が占めていたとは言いがたい。しかし、天保3年11月24日の覚書によると、本屋からの稿料未払い分が4両あるが、同じ本屋から購入する書籍の代金が5両1朱と6匁5分があるので、差し引き1両1朱と6匁5分の借りとなる、と記されている<sup>3</sup>。このような買い方をしていれば、稿料すべてが生活費に入つくることは無かったと思われる。

#### ○貯蓄が無かった

滝沢家に唯一残された男子であった馬琴は、兄二人が早世して途絶えた武家としての滝沢家を復活させたいという願望が強かった。息子鎮五郎を医師とし（後の宗伯）、滝沢家の八代目としたが、彼は生来病弱で38歳で死去。遺された孫・太郎のために、馬琴は御家人株を買うことを決意。不本意ながら書画会を開催して二百両ほどの金を手にし、そのうちの百五十両で御家人株のついた屋敷を買った。書画会の前には蔵書を売り払っていて、その後も大きな買い物の際には蔵書を売っていることから、たくわえがほぼ無かったことがうかがえる。

<sup>2</sup> 武藤元昭「馬琴の稿料生活」　『日本の古典 16 グラフィック版南総里見八犬伝』1979年、世界文化社より

<sup>3</sup> 同上

## 結論および考察

現代感覚に換算すると、馬琴の作家としての収入はかなりのものである。しかし、支出も多かったため、家計は苦しかったようだ。

『八犬伝』は全巻が出版されるのに 28 年を要した大長編だが、前半の面白さに比べ、後半は退屈である。新潮社版全 12 巻に置き換えると、『八犬伝』は全九輯の作品だが、一～八輯が新潮社版の 5 巻までに収まる。残りの 7 巻分がすべて第九輯なのである。

第九輯は犬士の一人である犬江親兵衛の活躍が主で、親兵衛のための物語とも言える。しかも上套 6 冊、中套 7 冊、下帙之上 5 冊、下帙之中 5 冊、下帙之下上編 5 冊、下帙之下中編 5 冊、下帙之下下中之式 5 冊、下帙之下編之上 5 冊、下帙之下套中下 5 冊、結局編 5 冊、結局下編 5 冊に分かれ、巻を細かく分けながら書き足しているように見える。

親兵衛はいったん登場したものの行方不明となり、再登場は天保 6 年発行の第九輯巻六である。この年は馬琴の息子宗伯が死去した年であり、孫の太郎は 8 歳であった。再登場した親兵衛は 10 歳という設定で、太郎と同年代である。第九輯が長い物語となったのは犬江親兵衛を太郎と重ね合わせて活躍させたかったから、と考えられるが、息子宗伯亡き後、滝沢家の大黒柱として一定の収入を得つづけなければならないという経済的な理由もあつたのではないか。『八犬伝』は人気作品であり、原稿は書けば売れたはずである。『八犬伝』を書き続けていればいるだけ稿料が入り、それが安定した収入になっていたと考えられないか。

山田風太郎は『八犬伝』終盤の執筆について作品の中で「曲亭馬琴は、有名なクレッチマーの気質分類の中の、筋肉型・粘着性気質の極限的な典型であると思われるが、一方、精神病者の症状にしばしば見られる「作話症」に近い、嘘ばなしの天才なのであった」<sup>4</sup>とし、長大な作品を書ききった原動力は生活でも本の完結でもなく、馬琴の心の奥から沸き出てくる物語だったと書いている。作家としてはそれが一番望ましいことであり、そうであつたと思いたい。

最終巻が出版された天保 13 年に、太郎は 15 歳。翌 14 年には、鉄砲同心として将軍家の日光参拝に共として加わっている。このとき馬琴は蔵書の一部を 5 両で売って、その金で十匁筒の鉄砲を太郎に買い与えている。

やはり貯蓄は無かったようである。

<sup>4</sup> 山田風太郎著『八犬傳〈下〉』廣済堂文庫、1998 年

【参考文献】

- ・磯田道史著『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』、新潮新書、2003年
- ・日本の古典 16 グラフィック版『南総里見八犬伝』、世界文化社、1979年
- ・曲亭馬琴著 濱田啓介校訂 新潮日本古典集成別巻『南総里見八犬伝』全12巻、新潮社、2003～2004年
- ・水野稔編、日本古典鑑賞講座第25巻『馬琴』、角川書店、1959年
- ・徳田武著『八犬伝の世界』、日本放送出版協会、1995年
- ・山田風太郎著『八犬傳〈上下〉』、廣済堂文庫、1998年